

小説

井上次雄・小野栄吉・宮崎眞弓 選

知事賞

俳句県

蜘蛛野 澄 香（栗東市）

プロローグ

俳句県が揺れた。それは、春のこと。県知事が「母」という言葉を季語にすると公言したのだ。

この一言は、空前の俳句ブームに沸く日本列島を駆け巡り、週刊誌やメディアに取り上げられては、賛否の議論が重ねられた。是非の声は収まらず、火の手は広がっている。私、如月レイナは、決着を気にしていた。

俳句県立北高等学校俳句部での雑談にも、知事の発言は幾度となく話題にのぼった。

今日は四月九日。あの発言から十日が経っていた。放課

後の部室。同じ高校二年生で俳句部の乃愛とさくらは知事の話題を選ぶ。

「県知事のあの件、どうなっちゃうんだろうねえ」

乃愛が俳句雑誌をぱたりと閉じ、ページに残った風を部屋に散らす。夕方の光が窓越しに差し込んで、小柄な乃愛のさらさらな髪を撫でている。黒目がちな大きな瞳には、どこか泣き出す寸前のような艶がある。

「あたし、『母』が季語になるの、やだな」

乃愛が、窓のほうに視線を流しながら言う。

「だってさ、『母』が登場する、先人のいい句がいっぱいあるのに。『母』が季語だと、季重なりになっちゃうもん」

乃愛の真正面の席に座っている、さくらが応える。

「乃愛ちゃんの意見に賛成。正岡子規の『行く年を母すこやかに我病めり』とか好き」

さくらの身長は平均的で、乃愛はそれよりもひとまわり小さい。私は身長が一七〇センチあるけれど、それでも、こうして真剣な顔のふたりに覗き込まれると、圧がすごい。

「ねえ、レイナちゃんはどお思ってるの？」

さくらはポニーテールを揺らして聞く。

私はショートカットの短い髪を指先で触りながら、やや曖昧に答える。

「知事の意図が、正直、よくわからない」

鮫島知事が初当選したのは、一年前。春の風が少し肌寒かった季節。県知事の任期は四年、その最初の一年を終え、今がちょうど二年目の始まりだった。就任以来、鮫島知事が行った数ある施策のうち、一番印象的なのは、やはり、県名の変更だったと思う。

私たちの暮らすこの県は、「俳句県」に改名された。昔、平成の時代に、香川県が「うどん県」としてPRしたことがあったらしい。それは観光のためのキャッチコピーで、正式名称ではなかった。

地方自治法第三条第二項には、「都道府県の名称を変更しようとするときは、法律でこれを定める」とある。つまり、県の名前を変えるには、国会でそのための法律が必要だ。それを鮫島知事は、就任後たった一年でやってのけた。だからこそ、私は思うのだ。

「知事の意図が、正直、よくわからない」

前例のないことを、当然のようにやってしまう人の腹

うちを、まだ掴みきれていない。

パイプ椅子に腰を掛けている乃愛が、ほんやり空を見ながら、ゆっくりと口を開いた。

「やっぱさあ……知事のお母さんが亡くなったの、ほんとに悲しかったんじゃないかなあ。春子さん、名前に『春』って入ってるし……亡くなったのも、今年の春だし」と、ぼつりぼつりと言葉をつなげた。

その続きをさくらが引き取る。

「春子さんって、全国的な俳句協会の役員をやってたよね？ それにさ、朝の番組の占いコーナー、あれの『ラッキー俳句』も監修してたんでしょ。俳句の世界とは、確かに深い繋がりがあったんだと思う」

次の瞬間、さくらが立ち上がり、ポニーテールを大きく揺らした。

「でもさ、『春子』っていう名前だからって、『母』を『春の季語』にするのは、ちょっとやりすぎっていうか。そんな個人的な理由で、季語にしちゃうのって、おかしいよ」その言葉は、さくらの腹の奥から響いていた。体育の授業中みたいな芯のある声だった。

部屋には、古い辞書のようなにおいがかすかに残っている。静かな風が入ってきた。

「母は、春だけじゃないよ」

乃愛も立ち上がり、本棚の季節順に整頓された歳時記を見つめながら、強く言う。

「うん。四季を通じて、母は存在するよね」

さくらは、はっきり肯定する。

「母は、季語じゃない！」

ふたりの視線が、またしてもまっすぐに私へ向けられた。意見を求めている、というより、心のどこかではもう答えを知っているような瞳だった。ふたりのその圧に押されて、「知事の意図が、直接聞けたらいいのにね」

私はつい口を滑らせてしまった。乃愛とさくらは目を合わせ、次の瞬間、にやりと笑う。

「じゃあさ、手紙を書こうよ。知事宛てに」

提案、という形だったけれど、もはや決定事項だと知っている。高校生活をふたりと過ごすうちに、考え方や行動が分かるようになった。私は頷いた。どうせ返事など来ないのだ。

翌日の放課後、三人で北高の一階にある売店に入る。文具コーナーの一角に、小さなレターセットの棚がある。

「これ、どう？」私が手に取ったのは、淡い桜模様が舞う、和紙のレターセット。さくらはすぐに「かわいい！」と頬

をゆるませ、乃愛は「白とピンクの組み合わせ、好きなんだよね」と指先で桜模様の輪郭をなぞった。

割り勘で買った便せんを部屋の机に広げる。乃愛がブルーブラックの万年筆で清書してゆく。

拜啓 陽春の候、県知事におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

私たちは、俳句県立北高等学校俳句部に所属する二年生の生徒です。

このたび、県知事のご提案により「母」を春の季語にする件につきまして、俳句部員として、深く関心を寄せております。

私たちは、「母」という存在が、春に限らず、四季折々を通じてそれぞれの時節に寄り添っているものだと感じています。

もし可能であれば、直接お話しできる機会を設けていただき、今回の季語制定に込められた県知事のお考えをお伺いできましたら、私たち俳句部の部員にとって、貴重な学びになると存じます。

ご多忙の折とは存じますが、何卒ご一考賜りますようお願い申し上げます。

俳句県立北高等学校俳句部

敬 具

深田乃愛

如月レイナ

宮ノ腰さくら

県知事から返事が届いたのは、投函から七日後のことだった。

第一章 深田乃愛

大変、大変っ。もう、ママに早く言わなきゃ、ぜったい驚くやつだもん。

あたし、深田乃愛は北高の門を出てから、自転車をびゅんびゅん漕ぐ。夕方の風がちよっと冷たくって、髪がくしゃってなるけど、そんなの気にしてられない。

四月十八日、水曜日。今日は特別なことがあった。

「ただいまー！」って、いつもよりちよっと大きめの声で玄関を開けた。

「乃愛、おかえり。着替えておいで」って、キッチンからママの声と美味しそうな香り。

「うんっ」って返して、靴を脱ぎながら心の中はもう県知事からの手紙のことदैいっぱい。

でも、まずは自分の部屋に入って、制服を脱ぐ。北高の制服って黒だから、他の学校よりちよっと大人っぽい。紺とか白の採用が多い中で、黒い制服は肌の透明感が増すようで、結構、好き。部屋着はアイボリーのふわふわロンドンに、うす桃色のスリッパ。この色の組み合わせ、可愛くて、落ち着く。

キッチンの横のダイニングテーブルへ。夕食という名のいつものおしゃべりタイムが待ってる。はやく言いたい、はやく言いたいって心臓がぼんぼんしてる。「いただきます」の発声により、おしゃべりスタート。

「ママ、県知事に出した手紙ね、今日、お返事が来たの！」思わず声が弾んじゃう。スूपカップを持ち上げようとしていたママが、

「えっ、なんて？」と聞いてくれる。

「高校生たちと会う機会を設けます、って。でもね、ただ面談するんじゃなくて、句会をしましょうって書いてあったの！」

「句会？」って、ママが首をかしげる。

「うん、句会！ メンバーは、レイナと、さくらと、あた

し。で、県知事と、その秘書さん。五人で、それぞれ一句ずつ出して、合計五句で二時間の句会をするんだって！」
あたしの言葉に、ママはうんうんって何度もあいづちを打ってくれる。毎日のおしゃべりルーティーン。この時間が、ほんとにほんとに大好き。

「句会にはテーマがあつてね、五七五の中に、ぜったい『季語』と『母』を入れないといけないんだって。県知事の指定。本番は十日後なの。だから、急いで詠まなきゃ」

気持ちはずでに俳句モード。季語は何にしようかな、菜の花とか？ 桜餅もいいな。もつとママに似合う季語はあるかな。

「乃愛なら、きつと素敵なの詠めるよ」ってそつと言われ、ふふって笑った。

「レイナさんと、さくらさんは、どんな句にするのかしら」
ママもわくわくしてる声。

「あたしも、気になるよ。でもね、本番までは、お互い内緒にすることにしたの。だってさ、事前に開示したら、高校生たちは対策しててずるいって言われそうだし。でもね、ふたりの句なら、なんとなく想像できるかも。さくらは、小五から中二まで海外にいたから、季語が朝顔とかかブトムシじゃなくて、クリスマスとか！ 外国っぽくてお

しゃれなのを選びそう。レイナのママは、すっごく綺麗で背が高いから、背高泡立草。それか、美女を圧倒するほど美しいって意味がある女郎花とかもアリかも」

夕食の間中、レイナとさくらはどんな句を詠むのかをママと想像した。

「ごちそうさま。部屋、戻るね」と言ったら、ママは「いい言葉、見つかるといいね」と、静かに応援してくれた。

食器の音が消えるころ、あたしは自分の部屋に入った。家族写真とぬいぐるみを飾っている部屋。いつもここで俳句を作る。

あたしのママは、四十二歳であたしを産んだ。待望の第一子。ほんとに、めいっばい可愛がられたと思う。ママは今、五十八歳。

レイナのママにばったり会った高校一年の冬の日のことは、なんだか忘れられない。

高校の廊下。すらつと背が高い人が目立っていた。スーッ姿がまるで雑誌の人みたいで美人。レイナのママは、さくらとあたしに挨拶してくれた。三十代で、ウエディングプランナー。長身のレイナと並ぶと芸能人がふたりいるみたいだった。

「うちのママと、見た目がぜんぜん違う。若い！」ってマ

マには悪いけど驚いちゃった。

もうひとつ。レイナのママのことで、びっくりしたことがあった。

あの日、午後四時。廊下の窓の外が、夕方の光に少しだけ金色を混ぜていた。三者面談のために来校したレイナのママが、レイナに顔を寄せて、こう耳打ちしたの。

「ごめん、レイナの担任の先生のお名前、なんておっしゃるんだっけ？ 面談の前に、確認しておきたくて」

あたしはほんとに驚いた。ママなら、こんなこと絶対ない。友達の名前も、担任も、副担任も、教科ごとの先生のフルネームまで覚えている。それは、きつと、毎日おしゃべりしているから。でも、友達は、ママとあんまりしゃべらないのかもしれない。それが普通なのかも。もしかして、あたしって、ママとべったりすぎる？ そんなことに気づいた出来事だった。

さて、ノートを開く。

俳句は、五七五。合計、十七音の文芸。

季語は、たくさんある。「蚊」は一音、「冬」は二音。「天の川」は五音。それに、「桜葉降る」は七音もある。言葉を、パズルみたいに組み合わせ、ぴったり十七音にする。

あたしにしか詠めない、あたしのママの句を提出したい。

他のママと違う、ママだけの特徴。それって、やっぱり「年齢」だと思う。あたしのママは、ダントツで年上。ノートに思いつく限り、使えそうな単語を書いていく。

白髪、しわ、老眼、葉、杖……。百個くらい書いたところで、手が止まった。

「靴」……そういえば、先月、お葬式の日。ママが、福祉用・介護用の靴を初めて履いた。

お通夜は、ひどい土砂降り。履いたお悔やみ用の黒い靴は、ぐしょぐしょ。一晚、乾かしたけど間に合わなかった。ママがシューズクロゼットの奥から引っぱり出したのが、福祉用の、黒色の、すこし丸っこい形をした靴だった。もともと、おばあちゃんのために買った靴。結局、一度も履かないまま、おばあちゃん天国に行ってしまった。タグも付いたまま保管していた新品の靴。

前日までの雨が、春の雪に変わった朝。ママは、その靴を履いて、出掛けた。玄関でべたんこの、マジックテープ式の、福祉用の靴を履いたママの姿を見たとき、あたしは、初めて、真正面からママの「老い」に向き合った気がした。友達のママより、うちのママのほうが早く、衰えていく。今、ノートに書いた「老化の象徴」は百個くらい。年々増えていくんだと思う。そう思ったら、なんだか怖くなった。

……ママが福祉用の靴を履いた。それだけのことなのに、大好きなママ。

毎日のおしゃべりタイムは、あたしの宝物。

あたしのこの気持ちを、ぜんぶ、十七音に込められますように。

句会が終わったなら、あの靴に合わせる、かわいい靴下を、いっしょに選ば。

ママ、ずっと長生きしてね。

春の雪母は今日から福祉靴 深田乃愛

第二章 宮ノ腰さくら

日曜の午後。わたし、宮ノ腰さくらは、なんとなくつけたテレビをぼんやり眺めていた。旅番組だった。句碑をめぐるプチトリップ特集。俳句が日本中でブームになってから、こういう番組がずいぶん増えた。令和の一桁台、十年くらい前までは、観光地とか、大型テーマパークとか、大阪関西万博の特集が多かったらしい。ちょうど今、画面には俳句県知事のお母さん、鮫島春子さんの句碑が映っている。

テーブルの上には、どら焼きがある。お母さんが、午前中に和菓子屋で買ってきたもの。

「ちよっと、あつためようかな」

そう思って、キッチンへ。六百ワットで十秒。ふわりと甘い香りが立ちのぼった。うん、ちょうどよさそう。句碑特集を流し見しつつ、どら焼きをかじった。その瞬間、手のひらに、ぬるりとしたものが触れた。あれ、と違って見ると、溶けたバターだった。どら焼きの中身が、あんバターだったみたい。生あたたかい液体が、指先から腕へ、流れてくる。

肘にまで流れ着いたバターを、蛇口の水でそつとすすぐ。でも、べたつきは、水だけじゃ落ちない。食器用洗剤を手にとって、肘から先を洗うことにした。

高校二年生。今日は四月二十二日。毎日、楽しく学校へ行っている。それは、俳句部の乃愛ちゃんとレイナちゃんのおかげ。ふたりがいてくれるから。

でも、入学したばかりのころは、違った。

自分で言うのも変だけど、わたしは、クラスで浮いていた。もつと言えば、中三のころから、ずっと。

小五から中二までを、海外で過ごして、中三から、日本に戻ってきた。中三の春。保健体育のテストで、事件が起

きた。テスト返却日。わたしは、クラスで唯一の満点者として紹介された。その授業のあとの休み時間に、同じクラス的女子が話しかけてきた。

「ねえ、宮ノ腰さんって、ちよつと変わり者だよね。さっきの保健のテスト、満点ってことは、問六の答え、『精子』とか『受精』とか、書きちゃったってことでしょ？ フツー、ニホンの学校じゃ、そういうのはね、分かってても空欄で出すんだよ。覚えておいたほうがいいよ」

わたしは、うつむいたまま、声を出せなかった。消えてしまいたい、と思った。

こんな「フツ」は、教わったことがない。

内臓とか、脳みそとか、生殖とか。自分たちの体について、知っておくこと。そのの、何が悪いんだろう。

高校は、わざと空欄で回答することがない学校がいい。そう思って、北高を選んだ。ここなら、同じ考えの生徒たちとうまくやれる。そう信じていた。でも、友だちはできなかった。あの日まで。

高校一年の秋。国語の授業で、松尾芭蕉を習った。

「古池や蛙飛びこむ水の音」

先生は、生徒を次々に当てて、感想を言わせていった。

「古池のポチャンって音が聞こえます」

「蛙の躍動感ある動きが見えます」

「周囲が静まりかえってるのが分かります」

そんな感想が続く中、わたしの番が来た。

「飛び込んだ蛙は、何匹だったのが気になる一句です。

三匹くらいかな」と答えた。

教室が、一瞬ざわついた。でも、すぐに静かになった。「やば」って、聞こえた気がした。

そこから先の授業の記憶は、ない。

「ねえ、宮ノ腰さん」

その声を聞いた瞬間、中三のときの恐怖がよみがえった。手足が、ひゅつと冷たくなる。

わたしの机の前に立っていたのは、別のクラスのふたり。背が高く、ファッションショーのモデルみたいなレイナちゃん。小柄で、目がくりつとしたアイドルみたいな乃愛ちゃん。ふたりとの初めての会話だった。

「今日の授業で、芭蕉の句に、面白い発言したって、ほんど？」とレイナちゃん言う。

別のクラスにまで広まっているなんて最悪。情報の伝達の速さが、嫌になる。このふたりも、わたしをからかに来たのかもしれない。上から目線のアドバイをしに、わざわざ。

そう思ったら、返事なんてできなかった。

「ねえ、宮ノ腰さくらさん」

乃愛ちゃんが、甘ったるい声で言った。

「俳句の読みの才能があると思うの。あたしたち、俳句部ねえ、入部しない？」

……え？ 思ってもいなかった誘いに、頭が真っ白になる。声が、出ない。

乃愛ちゃんは、沈黙に少し焦った様子で

「あ、ごめんね。ハイク イズ ア ジャパニーズ トラディショナル ポエム。カムジョイナス！ で、通じるかな？」と続けた。

……join us? 俳句部って、こんなノリなの……?!

今振り返っても、あの日の乃愛ちゃんの勧誘は、一筋の光だったと思う。その日の放課後、俳句部を見学して、すぐに入部した。学校生活に居場所ができた気がした。誘ってくれたふたりには、感謝している。ついでに、わたしの失態を別のクラスにまで広めてくれた、噂話にも。

さあ、どら焼きのバターも、すっかり落ちた。日本のどら焼きは、おいしい。買ってきてくれたお母さんに、「ありがとう」と言いたい。……でも、言えない。

お母さんとは、中学三年の保健体育のテスト事件のあの日から、まともに口をきいていない。乃愛ちゃんみたいに、お母さんとおしゃべりができたら、バターの件も、きつと面白いエピソードになるのに。

中三のわたしは、学校生活でつまずいていることを、悟られたくない、隠したい、心配させたくない。その一心で、お母さんとしゃべらなくなってしまった。

「うん」「別に」「大丈夫」

そんな返事ばかりで、もう二年が過ぎた。

お母さんは、めげずに話しかけてくれている。なのに、わたしは引つ込みがつかなくなってしまった。

窓の外には、大きな木が見える。秋になるとその枝に、糞虫がぶらさがっていた。細くて、頼りない糸に吊るされて、風が吹くたびに、ぶらぶら揺られてた。中三の時は、「わたしみたいだな」って、ずっと思ってた。

クラスにも、家にも居場所がなくて。ただ、そこにいるだけ。誰かの言葉ひとつで、気持ちがふらふらする。

もう、お母さんとの気まずい日々は終わりにしたい。わたしはレターセットを取り出す。桜柄の、やさしい色のレターセット。知事への手紙を書くときに使ったもの。余った用紙を、乃愛ちゃんとレイナちゃんが「桜柄だから、さ

くらが使つて」と譲つてくれた。

お母さんへ。

お母さん、どら焼き、おいしかったよ。

バターが入っていて、びっくりしたよ。

四月二十八日、土曜日、県庁で句会をするから、見に来てね。お願い。

さくら

風に揺れていた蓑虫みたいなわたしが、今、少しだけ、自分の足で立とうとしている。

素直なわたしに戻りたい、と強く思った。

蓑虫やほんとは母に甘えたい 宮ノ腰さくら

第三章 如月レイナ

四月二十四日、火曜日。朝六時。台所の窓から、淡い光が差し込んでいた。まだ眠っている家の空気を、おかあが作る味噌汁の湯気がゆっくりと満たしていく。

私、如月レイナは、食卓で制服の襟元を整えながら、湯気の向こうの母を見ていた。母は、焼き鮭を皿に移してい

る。

「はい、鮭。あと、ほうれん草のおひたしと、卵焼きもあるよ」

「ありがとう、おかあ」

兄も弟もまだ寝ている時間帯。通学に時間がかかる私だけのために、母は早く起きて、栄養満点の朝食を準備してくれる。

「ねえ、おかあ。知事宛てに、勝手に手紙出したこと、先生に怒られるかと思ってたんだけど、逆に、褒められた。県政に興味関心を持って、素晴らしいって」

「あら、さすが、自主自律が校風の高校ね」

「うん。なんなら、今日、校長室で激励セレモニーあるんだって。ちょっと緊張する」

おかあは、湯呑みに緑茶を注ぎながら、少し笑った。

「レイナが緊張するなんて、珍しいね」

「するよ、たまには。ねえ、おかあ。土曜日の句会、見に来れる？」

「その日は、大安だね。結婚式当日なの。だからどうしても行けないの。ごめんね」

おかあは申し訳なさそうに言った。ウエディングプランナーとして働くおかあ。大安の日は、例外なく忙しい。

「分かった。動画配信サイトの県庁公式チャンネルで、生中継もされるし、そのあとでも観れるよ」

「ありがとう。頑張つてね」

電車は、朝六時四十五分発。座席は空いている。いつも湖が見える側の席に座る。水面はただ静かに、夜の名残を抱いている。この路線は、数年前まで廃線か減便の話が出ていた。でも、鮫島県知事が「子どもたちの通学のために」と言つて、存続させた。

座席で句帳を開き、「母」の句について考え始める。

おかあは、ブライダル業界で働いている。少子化、晩婚化で業界がやせ細るかと思いきや、結婚式の多様化が進み、客単価は大幅に上がった。さらに、贈与税の大改正で、結婚資金の一括贈与が三億円まで非課税になったことも、追い風になった。おかあが担当した結婚式には、九十五歳の女性の生前葬を兼ねた孫娘の結婚式というものがあつたらしい。十人十色のお式。楽しそうに働いている。

さて、私の俳句作りは、多作多捨。通学時間に思いつく限り作る。でもその中で、満足できるものは、一句くらい。ゼロの日もある。

白無垢を着せる母の手春の風

花嫁の涙拭く母養花天

六月や母の合図にひらくドア

段取りのメモに母の字薔薇香る

囀や母の名刺は真珠色

どれも、母の仕事への熱意や、丁寧な所作、真面目に取り組む姿勢が出ていると思う。

でも、何かが違う。

言葉にできない違和感が、句帳の余白にじつと潜んでいた。

私は、北高の制服のスカートの裾を、ぎゅつとつかんだ。裁判官みたいな黒い制服。夏服も、黒。この制服が着たくて、一生懸命勉強した。無理してでも、北高に入りたかった。

理由は、ただひとつ。ブラジャーが透けない色だから。

おかあは、高校二年生の私に、スポーツブラしか与えない。綿百パーセント、真っ白。毎月毎月、新品を買ってくれる。まるで、「他のブラジャーが欲しい」と言い出すタイミングを与えないかのように。

乃愛も、さくらかも、おしゃれでかわいい。

お気に入りの靴から逆算して、コーディネートを組むらしい。でも、私は、違う。第一条件は、スポブラがばれな

いこと。だから、いつも濃い色の服。ぴっちりしたタイトな服は絶対に着ない。シルエツトでばれるかもしれないから。オーバーサイズのメンズ服を、スポーティーに着こなす。そのために、髪型はショートカット。話し方も、ちょっとカッコイイ系に寄せてみたり。

「スポーティーが好きだから、下着はスポーツブラを『自分で』選んでるの」

そう心の中で言い聞かせる。偽りを。

高校入学。背が一七〇センチあるからか、いろんな部から誘われた。バスケット部、バレエ部、なぎなた部。さらには、カメラ同好会が「被写体になって」って勧誘してきたこともある。でも、全部断った。着替えをしたり、薄着になったり、そんなの、耐えられない。

スポブラという極秘情報を隠すために、私はこうしてる。服も、髪も、言葉も、部活も。全部、秘密を守るための、鑑。

電車が駅に着いた。

時刻は朝七時五十八分。改札の上には、古びたテレビモニターがあつて、いつも朝はニュース番組を流している。テレビから、アナウンサーの星座古いの声が響く。

「一位は、てんびん座のあなた！」

私の星座だ。

「今日のあなたのラッキー俳句をご紹介！」

『スリッパを越えかねてゐる仔猫かな』

スリッパを越えることが難しい子猫ちゃん。

いずれ成長して、悠々とスリッパを越えていく日が来ますよ！ 今日があなたにとつて、その日かも？ では、気を付けていつてらっしゃい！」

アナウンサーの明るさと、高浜虚子の句に、背中を押された気がした。

越えかねてゐる。それは、私のことかもしれない。今日、少しだけ、越えてみようか。

スリッパの向こう側へ。

母は吾へ綿のブラ買ふ梅雨曇 如月レイナ

第四章 倉知美帆

県立図書館の窓際の席に、私、倉知美帆は朝から座っている。金曜日に有給休暇を取ってまで、俳句を作っている。今日の夕方の締め切りまでに、一句提出しなければならぬ。

図書館の吹き抜けは高く、漆喰の壁の白が心を落ち着かせる。児童書コーナーから小声で、でも抑揚のある読み聞かせの音がわずかに聞こえてくる。窓の外は、曇り空。机の上のノートパソコンの画面が淡く光る。パソコンのキーを静かに叩く。「母」「俳句」

検索窓に打ち込んだのは、関連する句や言葉を探す。けれど、どれも誰かの言葉であって私の言葉ではない。朝からの進捗は、ゼロ。

俳句を作るのは、義務教育以来のことだ。

それでも、こうして一句をひねり出そうとしているのは訳がある。上司である県知事が、高校生たちと句会を行うことになり、その場に、秘書課職員の私もメンバーとして参加することになったのだ。

知事は、俳句が趣味で、句会に何度も出席している。また、知事の母は俳句の世界で活躍する人だった。高校生たちは、俳句部に所属する、言葉に敏感な若者たち。しかも北高生。私の母校。対する私は、初心者。でも、OGとして恥ずかしい句を詠むわけにはいかない。素晴らしい句を詠まなければ。

振り返れば、この四月は、大忙しだった。

県知事の「母」を「春の季語」にする、との発言以降、

県民や俳句関係者からの「お怒りの声」を秘書として受け止める日々が続いた。受話器を置けば、すぐに次の電話が鳴る。その繰り返しだった。

週刊誌やテレビも面白おかしく騒ぎ立てた。

「県知事ご乱心」「ママが恋しい俳句県」

心ない見出しが、紙面や画面を賑わせた。

知事の母が亡くなられたあの日からの、知事の落胆ぶりを、秘書として間近で見ている。だからこそ、これらの報道には、正直、腹が立った。

知事の母、鮫島春子さん。

俳句界では、名の知れた存在だった。俳句の詠み手としての活躍にとどまらず、朝のテレビ番組の星座占いコーナーへの「ラッキー俳句」の提供など、活動は多岐にわたる。日本全国に広がる俳句ブームの火付け役のひとつとしても、過言ではないだろう。

そんな春子さんを亡くした知事にとって、「母」という言葉は特別な意味を持つものかもしれない。

知事宛ての手紙が届いたのは、四月十三日のことだった。電子申請が当たり前になったこの時代に、手書き。それだけで、目を引いた。トメもハネも丁寧な書かれた文字。差出人には、俳句県立北高等学校、深田乃愛、如月レイナ、

宮ノ腰さくらとある。そこには、彼女たちの思いが、まっすぐに綴られていた。

知事のスケジュールは、週に一度の知事と秘書との打ち合わせにて決まる。私は、秘書課の上司や先輩とともに、いつものように知事室に入った。この手紙を持って。知事室は届いたばかりの百合の香りであふれている。壁際の棚には、春子さんの写真。

知事の顔には、疲れがにじんでいる。それでも、背筋を伸ばし、椅子に座る姿は普段通りだ。知事には、目に見えない芯のようなものがある。これが、秘書課の職員一同がこの人を支えなくなる理由なのかもしれない。

打ち合わせの終盤、私は桜柄の白い便せんをそつと差し出した。

「知事、高校生から手紙が届きました。知事と直接、面談がしたいとの要望です」

知事は、便せんを目を通した。三十秒ほどの沈黙。そして、顔を上げた。

「倉知は、どうしたい？」

「私は、この思いに応えるべきだと思います」知事は、私の目を見て、頷いた。

「わかった。直接会おう。だが、意見交換だけでは足りない。

い。句会を開こう。ひとり一句、出し合って。テーマは母。必ず『母』と『季語』を入れること」

「はい」私は喜びを含む声で返事をした。

「日程の調整、高校生への連絡、記者への情報提供。倉知が主担当として動くこと。ほかの秘書はサポートをよろしく。あと、句会には、倉知も一句を詠んで、出るように」

「……はい」

(え、私も句会に、参加?)
写真の中の春子さんが、少しだけ笑っているように見えた。

図書館に持ち込んだ私物のパソコンは、一句どころか一文も入力ができないまま。

苦し紛れに、母のプロフィールを打ち込む。

母。A県で生まれ育つ。十八歳、高校卒業と同時に就職。高卒公務員として、税務署で働き始める。転居を伴う異動を繰り返し、B県、C県、そして、この町へ。父と出会い、結婚。妊娠を機に、母は退職した。その後、兄と私が生まれ、四人家族になった。父は消防士として現場で働く人。私たちは、穏やかな日々を過ごしていたと思う。

母の特技は、一円もずれない家計簿。電卓の速さと正確

さは、もはや職人技だ。日課は株価チェック。季節の移ろいを大切にし、四季折々の行事や食べ物に、ささやかなこだわりがある。春にはお花見、夏には浴衣、秋には栗ごはん、冬には柚子湯。

税務署時代の同僚とは、今でも連絡を取り合っている。年賀状のやりとりはもちろん、年に一度は泊まりがけで旅行にも行く。

昔、母に聞いたことがある。

「どうしてそんなに仲がいいの？」

母は、笑って答えた。

「同じ釜の飯を食べたからよ」

私は、それを慣用句だと思った。

けれど、母の話の聞いて、文字通りだったのだと知った。当時の税務署職員は、独身寮の一室で二人暮らし。人事課が決めたペアで、2LDKの部屋をひとり一部屋ずつ使い、トイレやキッチンは共同。職場も一緒、寮でも一緒。

私は「大変そう。息が詰まる」と思った。

けれど、母は違った。地元を離れての一人暮らしより、誰かとの二人暮らしのほうが、ずっと充実していたという。「朝ごはんや夕ごはんを、誰かと食べられるのが、ありがたかった」

そう、母は振り返っていた。

母は、仕事を愛していた。そして、仕事仲間を愛していた。きつと仕事仲間からも愛されていた。

母をテーマに句を詠むなら、私らしい切り口は「高卒」になるかもしれない。母は高卒の元税務署職員。父は高卒の消防士。兄は高卒の警察官。

そして私は、高卒で県庁に入った。

今から十二年前、十八歳で入庁した私は「自動車税課税課」に配属された。「税」という文字が入っているだけで、元税務署職員の母と接点があるような気がして、少し嬉しかった。

仕事内容は、課税通知の送付や、廃車になった車の還付処理など。上司も、先輩も、みんな優しくかった。「若いのに、しっかりしてるね」と言われるたびに、母もこんなふうに通っていたのかな、と想像した。

入庁して丸二年が過ぎようとしていた三月下旬。内示が発表された。当課に新人が配属されることが決まり、自然な流れで、私が教育係を任された。初めての役割だった。今までは教わるばかりだったけれど、四月からは、伝えることにも責任を持つ側になる。何かを託されたようであたたかい気持ちだった。

しかし、四月一日の朝。

給湯室の前を通りかかった私は、ある声を聞く。電子ケトルの沸く音と、陶器のマグカップの音。その合間に、聞こえてきた声。

「教育係、変えてください。高卒なんかには習うことなんて、無いです」

初めて聞く声。今日から配属される新人だろう。冗談ではなさそうな勢い。課長の宥めるような声もする。

私は、無言でその場を離れた。

新人とは、まだ話したこともなかった。自己紹介すら、していないかった。

不思議と、悲しいとか悔しいとか、そういう気持ちにはならなかった。

「いろんな考えの人がいるよね。しょうがないよね」とだけ小さくつぶやく。

そして、ふと、父と母のことが浮かんだ。

ふたりも、高卒で働いていた。もしかしたら、それぞれの現場で、同じような言葉を、聞いたことがあるのかもしれない。

別の職員が教育係として正式に任命されたのはその日の午後のことだった。私は、淡々とその報告を受け取った。

自動車税の一括課税日が近い。目の前の仕事に集中して、二十歳の春の一日を終えた。

そう。今までだって、目の前のことを淡々とこなしてきた。背伸びをせず、できることを、丁寧に。そして、知事が、私のことを見つけてくれた。それだけで、充分だった。

だから、三十歳の今日の私も、肩肘をはらず、等身大の俳句を読めばいいだけだとやっと気づく。かっこよくなくていい。

「高卒」という言葉を入れる。母の好きな季節の食べ物を入れる。これで良いじゃないか。母の好物のメロン。じゅうぶん素敵な句になると確信する。

机の上のパソコンに一句を打ち込み、この勢いで、県庁の文化課へ電子送信。提出を完了させる。金曜日の春の図書館。紙芝居が終わり、幼い拍手が私の席まで届いた。

高卒の稼ぎや母へメロン買ふ 倉知美帆

四月二十七日、金曜日。夕方。投句締切日。県庁の文化課のパソコンの受信ボックスに、参加者五人の句が出揃った。

明日の句会では作者名は伏せられ、句だけが並ぶ。そして、それぞれの句に対して、鑑賞や意見交換が行われる予定だ。

春の雪母は今日から福祉靴

蓑虫やほんとは母に甘えたし

母は吾へ綿のブラ買ふ梅雨曇

高卒の稼ぎや母へメロン買ふ

母よいま滋賀の若鮎頼もしき

いよいよ県知事との句会が始まる。

エピソード

私、如月レイナは県庁に來ている。両隣に乃愛とさくら。中庭には、たくさんの人が集まっている。ざっと見渡して、千人は超えていると思う。三期十二年の任期を終え、退任する鮫島知事の最後の退庁を見届けようと、夕刻の県庁は、ざわざわとしていた。

空は、少しだけ赤みを帯びていて、庁舎の外壁に、淡い光が斜めに差している。昭和十四年に竣工した建物はあの

日と変わらない。

あの句会の日から、十一年が経とうとしている。当時、高校二年生だった私たちは、二十七歳の社会人になった。こうして県庁の中庭で知事の姿が庁舎の玄関から現れるのを、親友の乃愛とさくらと共に待っている。

あの句会。あの春。

私たちは、それぞれの母を、五七五で表現した。それが、今につながっている。たぶん、そう思っているのは、私だけじゃないはず。

風が、少し強くなった。桜の花びらが、ひとひら、私の肩に落ちた。それをそっと指先でつまんで、空にかざしてみる。

十一年前の春に戻るような気持ちになった。

句会の日。県庁の会見室。

初めて入ったその部屋は、思っていたよりずっと広かった。でも、満席だった。県職員が、慌ててパイプ椅子を運び込み、通路の端に、ぎりぎりまで並べていた。

後方には、テレビ局。三脚の上に固定した大きな黒い取材用カメラがずらりと並んでいて、その後ろに、各局の腕章を着けたスタッフが立っていた。

フラッシュが、何度も何度も、私たちを照らした。あんなに光を浴びるのは、あれが初めて最後かもしれない。結婚式の新郎新婦ですら、あんな量は浴びないと思う。

客席には、県民、俳句関係者、新聞記者。

ぎゅちりと座っていて、熱気でむわっとしていた。乃愛が、緊張で指先をぎゅっと握っていたのを覚えている。さくらは、目を閉じて深呼吸をしていた。

句会は、県庁の文化課長の司会進行で、厳かに始まった。最初に読み上げられた句は、

「春の雪母は今日から福祉靴」

一瞬、場が止まったように感じたが、すぐに鑑賞、意見交換が始まった。

そして、作者が乃愛だと明かされた。

乃愛が、ゆっくりと立ち上がり、マイクを持った。彼女の声は、少し裏返りそうだったけれど、言葉は揺らがなかった。

「母が初めて、福祉靴を履いた日に春の雪が降っていました。友達之母よりも、あたしの母はずっと年上です。その事実にも今回の句作を通して向き合いました。いつまでも長生きしてほしいです」

その時だった。壇上から、鮫島県知事の声が響いた。

「あなた、大丈夫ですか？」

客席の記者に向かっただけの発言だった。

記者は、ぐじょぐじょに泣いていた。

「あ、え、す、すみません。なんか、ぐっ、っときちゃって。この取材が終わったら、わたし、母に、田舎の母に、電話して、大好きだよって伝えたくくなりました」

気がつけば、会場中からすすり泣きが聞こえていた。ハンカチで目頭を押さえる人。肩を震わせる人。乃愛の十七音が、こんなにも人の心を動かすなんて。

ここから、句会の雰囲気が変わり始めた。

パネルディスカッション風だった空気が、観客と一体化していく。次の句は、

「糞虫やほんとは母に甘えたい」

さくらの句だった。私は、驚いた。あの元気がっぱいのさくらから、寂しそうな句が出てくるなんて。中学三年生の時の学校でのつらい日々。この句会で、はじめて知った。乃愛がさくらを俳句部に誘った日を思い出す。しかも、なぜか英語で。そして、さくらの笑顔も。誘ってよかったな、と強く思う。

壇上から、鮫島知事が呼びかける。

「さくらさんのお母さま、いらっしやいますか？」

客席の一角から、さくらの母が立ち上がった。職員の話導でゆっくりと壇上にあがる。その足は震えていた。さくらが、母の前に立つ。まっすぐ、母の目を見つめていた。

「ごめんなさい。ほんとのこと、ずっと言えなくて。二年間も。お母さんに、長い間、つらい思いさせて、ごめんなさい」

その言葉のあと、さくらが母に抱きついた。

ぎゅっと、強く。さくらの母は、さくらの背中をそっと撫でながら、何度も頷いていた。

三句目は、

「高卒の稼ぎや母へメロン買ふ」

この句については、鑑賞が割れた。

乃愛は、「高卒の作者が、自分の稼ぎで、母にメロンを買った」と読んだ。

さくらは、「作者の父が高卒で、その父が妻、つまり作者の母にメロンを買った」と解釈した。

そして私は、「作者の母に、高卒の第三者がメロンを買ってきた場面」だと発表した。それぞれの読み方が違っていて、でも、どれも間違いない。

鮫島知事が、ゆっくりと語った。

「たしかに、鑑賞が割れやすい句ですね。でも、この句には、良さがある。どの場面であつても、メロンがとても美味しそうです。作者と母と、周りにいる人たちが、笑顔でメロンを囲んでいる。そんな光景が浮かびます。メロンが主役になっている、素晴らしい句です」

その言葉に、会場がふわっと和んだ。

作者で秘書の美帆さんが、マイクを持った。少し緊張した様子で、でも、しっかりと話し始めた。

「初めての俳句でした。戸惑ったけれど、楽しかったです。母のことや、自分のことを、こんなふうに言葉にできるなんて思っていませんでした。これを機に、俳句を作りたいです。さらに、家族の思い出や、今日の思い出を、活字で残したいと思います」

美帆さんは、有言実行だった。知事との出会いから、「俳句県」への改名、春子さんの死、そして高校生との句会まで。それらを、秘書の視点で描いた小説を出版した。タイトルは『十七音の春』。ベストセラーになり、本屋大賞を受賞。実写映画もされて、ロケ地となった俳句県の各所は、今では聖地として観光名所になっている。

美帆さんの二作目『ゆけゆけ高卒公務員』もスマッシュヒット。

今は、県庁を退職し、小説家兼俳句県の広報大使として、積極的に活動している。

同様に、私の句にも、知事の句にも、たくさんの鑑賞と意見交換が行われ、二時間の予定だった句会は、気づけば二時間半を超えていた。閉幕の瞬間、ふうっと、息が漏れた。

その直後だった。鮫島知事が、マイクを握った。会見室にいる全員が知事に注目した。

「皆さん。本日はお忙しい中、句会にお越しいただき、誠にありがとうございます。この場をお借りして、ひとつ、私からお詫びとご報告をさせていただきます。

先日、『母』という言葉、『春の季語』にすると発言した件につきまして、本日をもって、全面的に撤回させていただきます。

これは、私の出過ぎた考えでした。

正直に申し上げますと、私は、母を亡くした悲しみの中で、『母』という言葉、何か特別な形で残したいという思いがありました。

でもそれは、私個人の感情であって、あってはならないことでした。

『母』は季語ではありません。そして、季語にするべきでもありません。

今日の句会で、皆さんが詠んだ句、語ってください言葉の数々が、私にそれを教えてくれました。本当に、ありがとうございます。そして、関係者の皆さん、俳句を愛するすべての皆さんに、改めて深くお詫び申し上げます。申し訳ありませんでした」

この日を境に、賛否が入り混じっていた鮫島県政に、賛成の空気がじわりと広がった。

そして、三期十二年の確かな政治の土台を作った。

私は、句会を終えて、自宅に帰った。

玄関を開けると、母が立っていた。そして何も言わずに、私を抱きしめた。強く、でも、優しく。

「ごめんね」母は、そう言った。

母は結婚式での仕事を終えたあと、動画配信サイトで句会の様子を観たらしい。母は私に「秘密」を打ち明けてくれた。

母は、十八歳で結婚。十九歳で離婚。そして、二十歳のときに、私の父と再婚したと静かに語った。初めて知る真実だった。

若いころの離婚。それを、自分の娘には絶対にさせたくない。その思いが、ねじれてしまい、年齢に合わない下着を買ひ与えることで安心感を得ていたと、母は言った。

ウエディングプランナーとして働く母。「バツイチ」という過去を、隠しておきたかったとも。

私は、何も言えなかった。ただ、母の手を握った。その手は、少し冷たくて、でも、私の手を包むように、しっかりと握り返してくれた。

句会の翌日、日曜日。母とふたりで、百貨店へ出かけた。母のお気に入りのお百貨店。その下着売り場。私は、試着室にいた。店員さんが、メジャーで胸囲を測ってくれる。

鏡に映る、自分のブラジャー姿。母は、試着室の外で微笑んでいた。

くすぐったくて、うれしかった。

そして、いま——二十七歳の私たち。

県庁の建物の中で、拍手の音が響いた。玄関の扉が開いて、県知事が出て来る。大きな花束を抱えて。ベージュ色のスーツ。知事はスカートの裾を揺らしながら、ゆつくりと中庭に降り立つ。

鮫島啓子県知事。

千人の拍手の一部となって、乃愛とさくらと一緒に、初代俳句県知事を見送った。その拍手は、知事が車に乗り込み、車が見えなくなるまで、ずっと、ずっと続いていた。

鮫島啓子県知事のあの日の句は、俳句県の中央にある大きな湖——琵琶湖沿いに、句碑の建設が決まったらしい。

母よいま滋賀の若鮎頼もしき 鮫島啓子

拍手の熱がまだ残る両手で、私は乃愛とさくらの手を握る。ふたりと目が合う。あの時と変わらない、情熱を含んだ瞳。

これからも、言葉を、友を、そして、自分のこころを、大切にしていこう。

——俳句県の頼もしき若鮎として生きていこう。

春の風に、そう誓った。